

エズラ・パウンドと

dramatic monologue

児玉実英

序

劇的独白 (dramatic monologue) は、十九世紀後半から二十世紀にかけて多くの詩人によって用いられた手法の一つである。ブラウニングを始め、テニソン、スインバーン、イエイツ、近くは、T・S・エリオットなどが好んでこれを用い、それぞれ独自の方向にこの手法を展開させた。エズラ・パウンド (Ezra Pound) も亦この劇的独白を用い、特に一九一〇年代及び二〇年代に多くのすぐれた詩を残している。この論文の目的は、パウンドがこの手法を用いて一体どんな詩を残しているのか、又その用い方にどう云う特徴が見出しうるか、そして又この手法の発展の上に、どんな歴史的役割を果たしたか等を論ずることである。

論を進める前に、一体 dramatic monologue とは何であるかを定義しておく必要があると考える人があられるかも知れない。確かに悲劇の何たるかを知らずしてシェイクスピアの悲劇を論ずるのは愚である。しかし乍ら、悲劇の場合と同様、仮に dramatic monologue を斯々

の条件を具えた詩であるときめ、そう定義してしまふならば、直ちにすべての分類学者が陥いるような困難に直面することを予想しなければならぬ。即ち、それに類似した条件を具えた詩を dramatic monologue ではないとして捨て去るか、或いはこれを一種の dramatic monologue として取り入れる為にいくつもの例外を設けるか、何らかその様な工夫を絶えずし続けなければならぬからである。さもなくば、例えば Browning のそれを基準にして定義をなし、自から Browning 以後の dramatic monologue は衰微の一途をたどつたと云うような珍妙な結論を導き出してしまつたりする結果にもなる。

過去に於て、しかし乍ら、dramatic monologue の定義がなされたことがないわけではない。例えば Ina Beth Sessions は P. M. L. A. の論文に於て大体次のように規定してゐる。

A perfect dramatic monologue is that literary form which has the definite characteristics of speaker, audience, occasion, revelation of character, interplay between the speaker and audience, dramatic action, and action which takes place in the present. (完全な dramatic monologue とは、話者、語りかけられる人、場、性格の示現、話者と語りかけられている人との相互関係、劇的動作、現在行われる所作をもつ点で明確な特徴を有する文学形式である。)

この様な、謂わば外からの、形式的なそして概括的な定義だけで十分であることは言うまでもない。この小論の第二の目的はパウンドの dramatic monologue を謂わば内側から見直すことにより、一体 dramatic monologue にはどう云つた手法上の特質があるかを内的に

考察することである。

1. シモンドの "Ballad of the Goodly Fere"

先ずパウンドの初期の作品 "Ballad of the Goodly Fere" を例にとりて考察してみよう。

この詩は十四連からなるバラッド風の詩で、話者は新約聖書に現れる熱心党のシモンである。彼がキリストの死後に於て、その生前及び復活後の様子を想出するまま語っている形をとっている。宗教的なテーマを取扱いながら、この詩が作者の宗教性を裏づけも否定もしない処に問題がある。

シモンは驚きを伴った確信のない而もおどけたひびきをもってこう語り始める。

Have we lost the goodliest fere o'all
For the priests and gallows tree?

Aye, lover he was of brawny men,

O ships and the open sea. (ll. 1-4)

(我らは僧侶やはりつけ木の為にあの一番いい友達を失ったのだらうか。ええ、あの人は船や大海原のあらゆるれ男の好きな人だったのだ。) Goodly Fere (立派な友達、いい男) はキリストを指している。この詩が三つの部分に分けられるとすれば、この書き出しにつづく第一の部分はキリストが捕われの身となる場面である。役人達がどやどやと入り込んで来た時、キリストは声を上げて先ずこれらの使徒を

逃がせよと命ぜられた。我々は槍の間をぬって逃れたが、キリストは残っておられた。そして何故私が一人で町を歩いている時に捕えなかつたのだと、笑っておたずねになった、と云うのである。

When they came wi' a host to take Our Man

His smile was good to see,

"First let these go!" qu'our goodly Fere,

"Or I'll see ye damned," says he. (ll. 5-8)

(彼らが群なす人々と我らの親分を捕えに来た時の彼の笑いは見ものであった。「まずこれらを逃がせ。」我らのいい男は云った。「でなけりやお前たちは地獄行きだ。」彼はいった。)

第二の部分で話者シモンは時間をさかのぼって、断片的にキリストのそれ以前の事蹟を語る。最後の晩餐の席上使徒と共にぶどう酒をのんだ時のこと、宮の前で羊売りや両替商などをむちをふるって追い払われた時のこと、いざりや言人をいやされた時のこと、又、捕われることを知りながら晩餐の席へ進まれた時のこと、等、キリストに對し尊敬の念を以て、しかしあたかも親しい友人であつたかの様なひびきをもって語りつづける。

第三の部分は第二部からつながり、キリストが十字架に付せられてから復活までを矢張りシモンが語っている。彼はキリストが木の上に立てられているのを見る。彼らはキリストの手足を釘を打ち込み、血が熱くほとばしる。彼は十字架の上で死ぬ。しかしその後キリストは現われ、シモンはキリストが目前でみつばちの巣を食べられるのを見るのである。

この詩は色々な意味で興味ある詩である。例えばこの詩が ballad 形式を使用している故に、いくつかの Old Scottish Ballads と比較考察し、“Chevy Chase” の如く多くの古い ballad では人が英雄化され讃めうたわれているのに対し、現代のパウンドの Ballad では逆に神聖なる人神が戯画化されて歌われていると云う事実を論ずるのも興味あるテーマであろう。又この詩の話者としての熱心党のシモンを新約聖書に描かれている彼の原型と比較対照し、その性格の相違を考察するのも興味あることであろう。しかしこの論文では、特にこの詩の dramatic monologue としての意味を考察しなければならぬ。その為には、先ず話者シモンがキリストに対していかなる態度をとっているかをはつきりさせておかなければならぬ。

シモンのキリストに対する態度は単純ではない。それは複雑且つ曖昧なものである。彼は一方ではキリストを一人の平凡な、親しみ易い、又男らしい人間として見ている。シモンはキリストを称して “Our Man” *our man*, Goodly Fere と呼び、又 “No capon priest was the Goodly Fere/But a man o'men was he.” (ll. 15-16) (あの男は去勢して太らせた鶏のような坊主ではなかった。彼は男の中の男だった) と回想しているのである。つまりキリストを一方ではあくまで Man 人間として見てゐるのである。しかし乍ら他方では、彼は、キリストを “A son of God” と呼んでゐる如く、何か神性をもった存在であると思つてゐるのである。第六連では、

If they think they ha' snared our Goodly Fere

They are fools to the last degree.

“I'll go to the feast,” quo' our Goodly Fere,

“Though I go to the gallows tree.” (ll. 25-28)

もし彼らが我らの立派な友をわなにかけたと思つていたら
彼らは徹底的に阿呆だ。

「私はきょう宴に出かけよう」我らの立派な友は云つた。

「はりつけ木につけられに出かけることになるんだが。」

と云つて、キリストが単なる人間ではなかつたことを暗示している。即ち、キリストの中にある超自然的な、予言的な力に対して、躊躇なく尊敬と驚異の眼を以て眺めているのである。又その次につづく連に語られる奇蹟の業に対しても、ただそれは人間の限界を超えた人のみ出来るものであることを、暗黙のうちを示している。

シモンはキリストに対して、この相反する二つの態度をとつてゐるところが彼のキリストに対する態度は、この二つのみに限られてゐるのではない。これら、いわば表面に現われた態度の奥にひそむかくされた態度が、まだあるのである。それは彼がこの詩に於てキリストを描く言葉の中に一貫して含まれるひびき tone の中に見出されるものである。そしてそのひびきは、笑いのひびきである。(ひびき tone に関しては、拙稿 “A study on the management of tone in the poetry of Ezra Pound” 参照)

例えばシモンは第十連において、キリストが十字架につけられた時の様子を描いて、“the blood gushed hot and free” (熱い血が溢れるままに流れ出た) と云つてゐる。又第十一連から十二連にかけて、ガラヤの丘に運ばれるキリストの目をたとえて、

W: his eyes like the grey of the sea.

Like the sea that brooks no voyaging

With the winds unleashed and free. (II. 44-46)

(強風に吹きまわられて船跡もない灰色の荒海のように)と云っている。これら極度の写実性や、過大に非現実的な比喻は、その中に笑いのひびきを含んでいる。何故なら、それらはキリストの尊厳や神秘さを著しく引き下げ、又、不まじめさをさえ感じさせるおかしさを催す効果をもっているからである。シモンはキリストを自分の高さまで引き下げ、価値低下することによって、笑いと親しみを感じているのである。シモンは、人々の尊敬し又自分も尊敬しているキリストに対し、彼を人間の位置にまで引きおろすことにより、やはり彼も人間であつたと笑いかける態度をとっているのである。然しこの笑いのひびきは、一転してシモンの自己卑下的、乃至は自己嘲笑的な笑いと同時に、逆に、再びキリストの相対的位置を高める結果になる。

A son of God was the Goodly Fere

That bade us his brothers be. (II. 33-34)

あのいい友達は何の子であつた。

そして我々に彼の兄弟になれと云つた。

シモンはこのパラドックスに逢着し、彼とキリストとの差異を意識

するのである。即ち彼は、彼が神の子の兄弟にはなり得ても、畢竟神の子にはなり得ない不合理さを、謂わば自己卑下的な態度で笑っているのである。

シモンはかくしてキリストに対し、単なる人間であると見ると同時に神性をもった存在として眺め、次で彼を価値低下して笑い、そして自己を価値低下して笑うことにより相対的にキリストの価値を高めると云つた、複雑な態度をとっているのである。

一体シモンは、何故この様な態度をとっているのだろうか。彼の信仰の欠如の故であろうか。又不まじめな信仰態度の故であろうか。それは信仰の不まじめさでも欠如でもない。それは信仰の不確かさであり、曖昧さであり、不徹底さでもある。次の二行をよく吟味してみよう。

“Ye shall see one thing to master all:

“Tis how a brave man dies on the tree.” (II. 31-32)

「全てに勝る一つのことを見るであらう。

それは、いかに勇敢な男が木の上で死ぬかと云うことである。」

これはキリストの言葉であるが、それをシモンが回想し、自分の口を通して語っている一言である。もしこの二行が少し異った表現で語られていたらどうだったろう。

“Ye shall see one thing to master all:

“Tis why the Savior must die on the cross.”

「全てに勝る一つのことを知るであらう。

それは何故救い主が十字架の上で死に給わなければならないかと云うことである。」

この二行は前の二行に比し、殆んど同じ内容でありながら、そのひびきが全く異なるのに気がつくであらう。前者は、軽々しい、嘲笑的な、人を喰つたようなひびきをもっている。が、後者には、まじめな、真剣な、悲壮なひびきがある。前者はキリスト教信仰に関心をもちながら確信をもてない人間がとる表現法であり、後者は深い信仰をもつた人間がその深さから告白するような言葉である。シモンは後者のような真剣な態度を示す表現をとらず、前者のような信仰はもっているが、不確かな態度を示す表現をとっているのである。もちろんここに表れたひびきのみから判断して、シモンがまじめでないと言に云ってしまふことは出来ない。まじめに悩んでいたからこそ、かえって彼自身理解出来なかつたことに対して嘲笑的な態度をとり、ユーモアへ逃避するのである。しかし乍ら、はっきりと言いうることは、シモンがまじめには悩んでいたかも知れないけれども、ゆるぎない確信のある、深い信仰はもち合わせていなかったと云うことである。

このようにして、シモンがこのバラッドの中に於て強烈な信仰をもつてキリストを讃えていると解するのは誤りであり、又キリストを嘲笑し去っていると解するのも誤りである。彼はキリストを平凡な、人間味のある、親しみのある友人として眺め、同時にキリストの超自然的事蹟に関しては、これを人業ではないと驚異の目を以つて眺めはするが、その前に身を投げ出すほどの確固たる信仰はもっていない為に、

半ばキリストを笑い、半ば自らをも嘲笑すると云うのが、この詩におけるシモンの真の姿なのである。

では一体シモンの性格はどんなものであるのだろうか。それは彼のキリストに対する態度から帰納的に考えられ得るものであるが、それは彼の *indecisiveness* であり、*humor* であり、不徹底さ、曖昧さであり、又それに対する嘲笑的な態度もある。

二、パウンドの劇的独白

シモンのキリストに対する態度と、それを通して推察できる彼の性格を一応かく分析した後、少しふり返つてこの詩全体を我々読者の目から見なおし、この詩の *dramatic monologue* としての意味、言いかえればこの詩が *dramatic monologue* の形式で書かれているが故に有する他の詩とは異つた特性を考察してみよう。

先ず第一にこの詩のような *dramatic monologue* に於て、読者の知り得る全ては話者シモンが語る処のものだけである。即ち、全て読者に伝えられるものは、シモンの目を通して見られたもの、又シモンの耳を通して聞かれたものが、シモンの口を通して語られるものだけに限られている。シモンが彼の目を通してみたキリストが彼の口を通して語られ描かれているのである。その結果読者は、知らず知らずの内にシモンの感情、性格、思考法等を理解し、シモンに対しある種の同情を寄せながら彼の話に耳を傾けているのである。これがこの詩のような *dramatic monologue* の形式に見られる第一の特徴ではないかと思われる。即ち、言いかえれば、読者に伝えられる全ては話者の口を通して語られる処のもののみであると云うこと、従つて、それは話者の経験した処のものに限られ、又それには長所も欠点もある事で

はあろうけれ共、読者は話者を容易に理解し又同情を寄せる事が出来ること云うこと、それから又、少くとも作者は己の手法を用いることにより、読者をして話者に興味をもたせ、同情させようと意図する事が出来ること云う事である。これがこの詩の第一の特徴と云い得るのである。

第二にこの詩の特徴と言いうるものは、話者シモンが自分自身の性格に関しては、直接的には、全く何も語っていないと云う事である。彼は自からの心情、性格について語る代りにキリストに關して物語ることを通し、自己の内心を露ていしているのである。我々が先刻来こまかく分析して来たのもその為であったのであるが、シモンの不徹底な、曖昧な性格は彼が直接それを告白しているのではなく、彼のキリストに対する不確かな態度により、間接的に示しているのである。読者は彼のキリストに対する態度を明かにすることにより彼の性格を見出すのである。読者は、話者が婉曲に自己の外にある対象、或いは自分自身以外の人間について物語る時、それらに対する話者の見方、受けとり方、態度、或いはそれらを表現する時の言葉に表れたひびき *tone* などを注意深く観察することにより、それを通して間接的に話者の性格を理解するのである。読者はそれ故、話者を見ると同時に、話者の語っている対象をもあわせ見るのである。そしてそれと共に話者がいかなる色ガラスを通して、或いはいかなる偏見を以て対象を見ているかを同時に考慮にいれて判断しながら話者を理解するのである。

The Poetry of Experience: The Dramatic Monologue in Modern Literary Tradition に於てその著者 Langbaum は *soliloquy* (劇中独白) と *dramatic monologue* (劇的独白) とを区別して、次のように言っている。

The meaning of the soliloquy is equivalent to what the soliloquist reveals and understands, the poetic statement being as much as he has been able to rationalize, to see in terms of the general perspective. But the meaning of the dramatic monologue is in disequilibrium with what the speaker reveals and understands. We understand the speaker's point of view not through his description of it but indirectly, through seeing what he sees while judging the limitations and distortions of what he sees.

(劇中独白の意味は独白者が言葉に言い表し、又理解している意味と同じである。詩中で語る内容は、彼が一般的な見通しのもとに意味を見出そうとして理解したものと同じ内容である。しかし劇的独白の意味は、話者の言い表したり理解したりしている意味と異ったものである。話者の観点を理解するのに直接話者が自分の観点を語らない故、間接的に他のものを見るのを見て、その見方の限界や曲解をも合せ見ながら我々は理解するのである。)

Soliloquy と *dramatic monologue* を区別するのにこう云う分類のし方をするのが適當かどうかは別として、両者を比較することにより、この詩が *dramatic monologue* の形式で書かれているが故にもつ独自の特質即ち読者が、話者と、話者の描いている対象と、彼のそれに対する態度や観点の限界とを合せ見ることにより彼の性格を見出すと云う特質が明かにされているようである。この手法を用いて、作者はより文学的に人物の性格描写をすることが可能である。例えば、自分

の考へていることと、語っている内容とが皮肉にも喰ひ違つてゐるよ
うな、いわば分裂症的な現代人を、特に微妙に描くことが出来るので
ある。

第三にこの詩に於ては、明確な作者の結論が表わされていない。読
者はパウンドのキリストに対する態度、或いはシモンに対する態度が
どんなものであるのか、殆んど全く知ることが出来ない。一体このシ
モンの如き信仰の曖昧さ、確信のなさに對し、パウンド自身はどう云
う態度をとつてゐるのだろうか。又我々にどう云う態度をとればよい
と教へてゐるのだろうか。パウンドは明確な答を與へてゐない。

では彼は全く答を用意してゐないのだろうか。ここで彼は明確な結
論を下すことを無責任にも全く回避してゐるのだろうか。或いはそれ
を怠つてゐるのだろうか。それはどちらでもない。彼は故意に結論を
與へてゐないのである。何故ならパウンドは、この詩に於て提起した
問題に對して全く結論を付加しないことにより、逆に、この問題に関
する結論はいくつでもあり得るのだと云うことを強く暗示してゐるか
らである。

このことは一般的に *dramatic monologue* についても言ひ得る。
Langbaum は先にあげた彼の著書の中で *dramatic monologue* を規
定して *suspension of judgment* と云う言葉を使つてゐる。彼の言う
判断の保留とは、右にのべた結論を下さないと云うことと同様な意味
である。しかしこれをもう一步進めて考へる時、作者は *dramatic*
monologue の手法を用いてただ一つの判断を保留すると云う消極的
な態度をとつてゐるだけでなく、もっと積極的に、一つのみならずい
くつもの判断が可能であると云うことを、無言のうちにも宣言してゐる
のであると考へられる。

同時に *dramatic monologue* は、もう一つの積極的な機能を有す
る。それは、作者が結論を與へないことにより、逆に読者に、読者自
身の結論を見出すことを迫ることである。パウンドのこの詩に於ても
作者がシモンの不徹底な態度を何とも批判せずただ放置してゐるこ
を不満に思い、読者は、では自分だったらいかなる批判を下すであろ
うかと自問せざるを得ないであろう。読者各人がどんな観点に立つて
どんな批判をしようかと、或いは批判の背後にある思想体系がどんなも
のであるかと、或いはそれがなからうとも、*dramatic monologue* は
その如何に拘らず、提起された問題に對する読者自身の再考、判断、
批判の必要を迫るものである。

三、ブラウニングの劇的独白との比較

以上三つが、大体パウンドの “Ballad of the Goodly Fere” の理
解を通して、それが *dramatic monologue* なる形式によつて書かれ
ているが故に引き出しうる特徴であると考えられる。しかし乍ら果して以
上の事が他の多くの詩人の手になる *dramatic monologue* にもあて
はまるのであるうか。

この次に、パウンドがそのエッセイの多くの中で興味を示している
ブラウニングの *dramatic monologue* と比較することにより、第一
に今引き出した三つことは代表的な *dramatic monologue* による
詩を書いたブラウニングに關しても言ひうることかどうか、第二に、
パウンドの *dramatic monologue* はブラウニングのそれと比較して
いかなる独自の特徴があるのか、この二つを考察してみよう。
ブラウニングはその *Dramatic Lyrics*, *Dramatic Romances*, *Men*
and Women などに多くの *dramatic monologue* の秀作を残してゐる。

る。中でも最もすぐれたものの一つと言われているものに“*My Last Duchess*”があるが、これをとり出してしばらく考えてみよう。

この詩は *de Vane* によれば、一八四二年“*Italy*”と題して出版され、後二度ばかり異なる詩集に入れられたり標題が変えられたりしたが、内容は殆んどもとのままであると云うので一八六三年のテキストを用いる。

余りにも有名なこの詩の内容は改めて紹介するまでもないことであるけれど、論を進める上に必要な点を簡単に記すと次の通りである。

この五十行余りの詩の中で語っているのはルネサンス期イタリーの、ある公爵であり、語りかけられているのはある伯爵からの使者である。公爵は使者を宮殿の中に案内して自分の先妻の肖像画を見せ、彼女の優しさ、ほほえみ、情熱、深いまなざし等が秀でて描かれている肖像画を賞讃する。そして生前の彼女の愛らしい姿を想出しながら彼女の面影を語る。

最後の十行に至って公爵は、次々と驚くべき真実を語る。彼は或る日彼女を殺害したと云う事実を自白するのである。平然として語り続ける彼は、使者に向かって出かけようと誘いかける。そして、序乍らと彼は云う。「貴殿の伯爵は恵み深いので有名だが、娘殿の持参金が目当てで再婚する私の気持はわかっておられるだろうな」と云う。

I repeat,

The Count your master's known munificence

Is ample warrant that no just pretence

Of mine for dowry will be disallowed; (ll. 48-51)

「それから」と彼は階段の横にあった海王神の像を指して云う。

「この海王神を見てごらん。たつのおとし子をならしている。珍奇なものだと思っておいてあるのだが。インスブルックの領下のクラウスが私の為に青銅で作ったものだよ。」

Noise Neptune, though,

Taming a sea-horse, thought a rarity,

Which Claus of Innsbruck cast in bronze for me! (ll. 54-56)

今まで、妻を愛し芸術を解するが故に親しく感じた公爵は、一瞬にして悪魔と化す。彼が自分の妻を殺し、金にいとわない伯爵の娘を新しい嫁にすることにより、持参金を得ようとして企んでいたことがわかるからである。更に又、青銅製の海王神の像を珍奇なものとして蒐集している事実から、先程肖像画を賞讃したのは、実は先妻への愛からでも芸術への憧憬からでもなく、単なる好奇心の慰さめものの一つであったことがわかるからである。

このすぐれた性格描写によって有名なブラウニングの dramatic monologue についても、先程の似た dramatic monologue に於ける三つの特質が明かに現れているようである。第一に読者の知りうるすべてのものは、話者公爵の口を通して語られるものだけであり、その結果、読者は話者の心情を可成り深く理解することが出来、いわば同情的な立場に立って彼に耳を傾ける。第二に、読者は話者の語る処からその性格を見取り、彼の長所短所偏見を考慮しながら彼の話していることを聞く。それ故、彼に同情しながら同時に彼の話の限界を理解しながら耳を傾けることが出来る。第三に、この詩に於ても結論が示されていない。妻を殺して再婚しようとしている公爵の道徳に関してブラウニングは是とも非とも云っていない。答は読者によって色々異なったものがあると云うことを、結論を下さぬことによって暗示してい

るのである。又作者が善悪を問わぬことに不足を感じ、読者は自から公罰の道德を批判する必要があるのである。

以上「パウンドの“Ballad of the Goody Fere”」について言いた三つことが、この詩についても言おうと云うことが解されるのである。

四、パウンドの劇的独白の特徴

では、二つの dramatic monologue を比較してどんな相違が認められるのだろうか。種々の点が数え挙げられるであろう。例えばブラウニングの詩では種々のひびき——愛情こまやかなひびき、極悪無情なひびきなど——が入り混っているのに対し、パウンドの詩ではただ一つ、嘲笑的なひびきしかない、とか、又、前者に於ては heroic couplet が用いられているが自由にリズムが変えられたり、run-on-line がなされているのに対し、後者では、古い ballad 形式を用いながらそれを変形することなく、可成り厳格に終始守っていると云うようなことが云えよう。

しかしこの両者の比較から、特にパウンドの詩の特徴としてここで問題に出来る点は、ブラウニングの詩では、書かれたのが十九世紀であるが話者は典型的ルネッサンス人が再現されているのに対し、パウンドの詩では、話者が二千年前の歴史的人物であるのに、極めて現代的な性格をもっていると云う点である。パウンドの話者は非常に強く現代的なセンスをもった過去の人である。この事実はいわゆる他の dramatic monologue の中にも見出すことが出来る。例えば“The Tomb at Akr Caar” “Sestina: Altaforte” など、話者は歴史上の人物又は過去の存在であるが、その中に現代的な性格や感覚を強くも

っているのである。

何故パウンドの dramatic monologue の話者がこのように現代的性格をもっているのであろうか。それは彼が出版した詩集の一つ、*Personae* の書名にはのかに暗示されているように思われる。語源的にはこれは *persona* であり、何物かが音を通して伝えられるその媒介物を意味したものであつたらしい。しかしギリシヤ悲劇では *mask* (仮面) の義に用いられ、役者達が舞台でこの仮面をつけ、観客達はこの仮面を通して深い思想や感動が音に変えられ伝えられるものと考へたのである。R. P. Blackmur はこの詩集の書名を辛辣に皮肉っている。パウンド氏は自から詩集を仮面 *Personae* と名づけ、その詩集を通して人生の最も深い真理を詩人パウンドが語ろうと云う意図をもっている。しかし彼の秀作と云われるものは、彼の原作ではなくほん訳ではないかと云うのである。しかし *Personae* なる書名を、限られた意味にのみ象徴的に解するのは独断にすぎない。パウンドの意図は他の処にあつたようである。現代的感觉をもつ詩人パウンドは歴史上の人物を仮面として借用し、当時の歴史を現代的な眼を以て眺め返しているのである。同じ詩集に収められた詩には色々異つた話者が存在するが、それらの話者は実は仮面であり、本当に喋っているのはパウンド自身であるようにきこえることが多い。書名の象徴的な意味をとやかく議論することは愚であるが、ただ一つ確かなことは、パウンドの dramatic monologue の話者は、殆んどの場合現代的感觉をもっていること、そしてその理由の一つは、パウンド自身が薄い仮面をつけ姿をかえて語っているからであると思われると云うことである。パウンドが dramatic monologue の発展に貢献した点は、このような現代的感觉のある話者の創造と云うことであると考へる。何故なら、

何事も直ちに決断が出来なくなつた現代人、自己を喪失した現代人、又自己の思考と行動と喋っていることが分裂してしまつた現代人を描くこの dramatic monologue が最適の形式であることを彼は再発見し、後、エリオットの“Purloin”以下多くの詩がこの形式によつて書かれるまじいかけを、彼は作つたからである。

結 語

現代詩の中の一つの流れの内、dramatic monologue の伝統は今なお続つてゐる。Frost を始め、Amy Lowell, Robert Lowell, Masters 近へは Randall Jarrell などが、この形式を好んで用いてゐる。その一連のつながりのつらむは二十世紀に於ける創始者として、パウンドの dramatic monologue の使用は意義あるものと云われなければならぬ。

註

- ① PMLA, June 1947, p. 508. 及び Claud Howard, “The Dramatic Monologue: Its Origin and Development,” *Studies in Philology* (Chapel Hill, 1910); S. S. Curry, *Browning and The Dramatic Monologue* (Boston, 1908, 1927) など参照。
- ② Robert Langbaum, *The Poetry of Experience: The Dramatic Monologue in Modern Literary Tradition* (London, 1957), p. 146.
- ③ 例えば “T. S. Eliot” と題するエッセイの中で、パウンドは「パウンドの *Men and Women* を讀んで、’The form of these poems is the most vital form of the period.’ といふのである。
- ④ William Clyde de Vane, *A Browning Handbook* (New York, 1955), pp. 107-9.

- ⑤ R. P. Blackmur, *Form and Value in Modern Poetry* (New York, 1957), pp. 80-81 参照。

書評(一一五頁から) ある。他の人々にとつても、この書物は作品論の様々な方法の事例と可能性を示している点で学ばるべき点が少ない。誰しも何等かの形で感じている理論と実践の間隙——小説の理論と具体的な作品研究や批評との間隙、或は作品論とそこからつちかわれてくる小説理論とのへだたり——この書物はそういうへだたりを充ててくれるように思える。

この書物は一見したところ何の変哲もないパーバー・バックの書物で、白地の表紙に、天地の余白を七・三にとつて、黒い太い文字で表題が書いてある。ところがその中の SCARLET LETTER の A だけが、文字通り、緋文字なのである。『緋文字』は “ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GUL ES.” (黒き地の上に、赤いAの字) と云つて Andrew Marvel の “The Unfortunate Love” 中の言葉をもつたところのような一句で結ばれてゐる。『緋文字』の内容をビタリと視覚的にイメージで表現した一句なのだが、この書物の、太い黒い文字の中に赤いAの字を入れた表題は、この一句を形象化したものである。一見何でもなげ表紙なのだが、『緋文字』という作品を理解した小僧ほどの表紙である。(同時に入手した別の本は、太い濃緑色の文字に赤いAが入つてゐる。)

編者 S. L. Gross がホーソンの研究で Ph. D. を得た新進の学者らしいが、『緋文字』を深く理解してゐなければできない仕事を立派に果つてゐると言ふべき。(B. B.)